最終回
モックン・カズローの

「京」潮の香り

人生の岐路に立った福井さん、その彼と過ごしたバンコクの数日。

大病を患い退院してから約1年、創作料理「ふく井」のオーナー隆（りゅう）さんの元気な姿を見たのは、「十日えびす」のことだった。弟の健さんに任せっきりだった店は兄・隆さんの復帰を祝うかのように、縁日の出店をも蹴散らす勢いで賑わっていた。

毎年えべっさんで「人気寄せ」を買い求めたその帰りは、その大和大路沿いの行き付け「ふく井」に顔を出すのが験担ぎであり、今年は隆さんの具合も案じていたことからその行動パターンはマストなものだった。

例年以上の賑わいに驚かされていると、すかさず隆さんが気を回し、無理からの席をつくってくれた。この期間は縁日構成で普段メニューはないのだが、こっそりワインを振る舞ってくれたりもして気分は上々、忙しそうに動き回る彼の姿を見られるだけで何よりも嬉しかった。帰り際に「今年はこの売り上げのお陰で大好きなバンコクに行けそうや。心配かけたおふくろや弟にも現地を案内したいしな」。そう言った彼の顔が忘れられなくて、私は彼の滞在中にバンコクに行くことを決めた。この店の常連にあゆみさんという日本に帰化したタイ女性がいて、彼女の実家、ラチャブリーという片田舎の滞在を含め、3カ月は現地でリハビリするといった彼の環境も、合流する側にとってはスケジュールだてにも好都合だった。元来、隆さんに負けず劣らずの東南アジア好き、その私が今回タイに飛ぶ理由が、実はもう一つあった…。

そんなこんなでバンコクに着いたのが2月下旬。スワンナプー着が21時50分、そこから20分ほど車を走らせ、パレスホテルでスーツケースを紐解いたのは22時半頃だった。中途半端な機内食で小腹が空いたのか、隣のラマダホテル周辺の屋台で、クエンティヤオ米の汁細麺をかっ込み、焼き鶏を5本ほど買ってシンハーでもやりながら部屋で隆さんを待つことにした。2週間前から日程を伝えているというのに彼はいっこうに現れず、空港で出迎えてくれていたのかしらと気を揉んでいると、唐突に部屋の電話が鳴った。何でもパレスとプリンスを間違えて、レジストレーションで調べた名前も、レセプション嬢が聞きちがえていたらしく、結局そこのホテルに私が泊まっていないことが判明したというのだ。

ばつの悪そうな彼が私の部屋を訪ねてきたのはすでに日付を跨いだ後だった。ローカルビールを数本、お決まりのレッドブルや屋台のつまみなどを抱えてやってきた彼を見るのはほんの2週間ぶりだったが、現地の人間と見分けがつかないほど日焼けした顔は至って元気そうだった。人恋しくて堪らなかったのか、のべつ話しまくる隆さんとの3〜4時間が過ぎ、彼が帰ったのは4時前頃だった。

「欲しいと思ったらその機を逃がすな！ ここらで同じ店や物を探すのは容易でない」そんな隆さんの言葉どおり、ウィークエンド・マーケットで事務所に必要な雑貨や私服を暴れ買い、2日目が過ぎた。マッカサンの衣類問屋街や「プラティナム・ファッションモール」辺りも大物色、年々モールの数が増え（「BIG-C」横の雑居街が廃墟になっていたのはショック）、現地のファッション属性も随分とハイセンスになってきた事が如実に分かる、サイアム界隈の街並みであった。

全快したようでも、まだ100％の健康体を維持しきれないのは当然のこと、終日買い物に付き合ってくれた彼を気遣い一旦別れ、21時からの遅めの食事を約束した。屋台やローカル食堂での飲み食いがほとんどだった我々は、今どきのバンコクを見ようと9・11事件以来「ワールドトレードセンター」から「セントラル・ワールド・プラザ」へと改名した複合商業施設へと紛れ込んだ。「伊勢丹」と「ZEN」に挟まれたショッピングセンター内で偶然見つけた地元のチェーン「Mr.Lee Cafe」に足を止めた。

値ごろ感やカジュアルなインテリアに一応の納得、オーナーを企業キャラにしたあたりはどうかと思いきや、閉店時間も迫っているので入店を決めた。

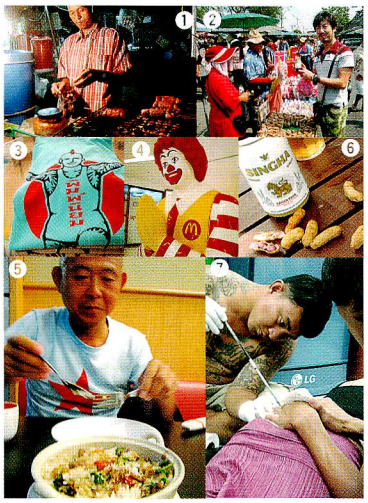
トムヤムクンやパップン（空心菜）炒め、細切り牛肉のまぜご飯などは、外食産業然としているにもかかわらず結構美味かった。食も喉も細くしていた隆さんにしては珍しいガッツキよう、その姿を見るだけで大満足だった。

上座仏教のお国柄、施設内に合掌ポーズで立つマックのドナルドが何故かとても柔和に見えた。

次の日は朝からホテルのプールで隆さんとリゾート気分。彼が毎日のように運んでくれる土産の中で、特に美味かったのは生ピーナッツを塩茹でにした屋台のスナックだった。

午後からは隆さんとの別行動である。今回の第二の目的、プーケット島へ。異国での時間は祇園で朝まで飲み明かしているのとは訳が違う。バスに乗り込む前に隆さんとのハグ、そして互いに見えなくなるまで手を振っていた光景はさながら「あいのり」か、生涯で忘れもしない別れ路だった。

CAがサーブするギャレーカートに思いっきり膝をぶち当てられたバンコク・エアウエイズの印象もどこ吹く風、私はパトンのワットとミットが切り盛りするタトゥーショップに心浮いていた。5年前に初めてこの島で出会ったバンブータトゥーを左肩に入れて今回で3度目、もちろんファッションではなく自分の護符を完成させるためだった。詳しくは言えないが、その痛みの中に、新たな人生の岐路に立った福井さんの幸せをも願っていた。



❶マッカサン周辺のソイ（小道）に集まる屋台。この炭火焼き鳥も一人前60B、約150円ほどセブンイレブン前に何故か密集する屋台群が面白い。❷ウィークエンド・マーケットもようやく迷子にならないで済むようになった。オバマTシャツブームを横目にチープな子ネズミTOYを手にする筆者。❸グリコマークもタイ解釈では、こんなパンクかつトライバルになってしまうTシャツの一例。❹トイザらスもドナルドも合掌ポーズが当たり前の小乗仏教国。京都も見習いたい姿勢だ。❺日本進出も目論む高級中国料理「Lee Kitchen」のカジュアル展開「Lee Cafe」での福井さんの食欲旺盛なお姿。❻この生落花生の綺麗な紫色が見えるだろうか。食感の柔らかさの風味に驚かされる。日本では気軽に食べられないのが残念だ。❼あまりお見せしたくないが、Watt氏のバンブータトゥー・ワーク。トライバルというよりは、タイの仏教儀式で僧侶の仏針により体に刻む護符「サクヤン」が変遷したものと思われる。アンジェリーナ・ジョリーが背中に「サクヤン」を入れていたっけ。

モックン・カズロー●京都生まれの京都育ち、生家は染屋という生粋の京都人。現在の「京都CF!」の根幹に携わった前編集長。現在は「京都CF!」のご意見番を務める傍ら、広告企画制作から同志社大学のプロジェクト講師まで、ジャンルの垣根を越えて京都にまつわる仕事に従事する。趣味のサーフィンより、街場の小波に乗るのが上手いともっぱらの評判である。「京都CF！」スタッフブログ「ご意見番の無責任、町案内」連載中